

書 評

「科学者の不正行為 — 捏造・偽造・盗用 —」

山崎茂明／著

東京 丸善株式会社

2002年3月25日発行

A5版 195p 定価 2,400円

日本の某製薬会社の研究グループが Nature Medicine の2001年1月号に発表した論文を撤回したことが各新聞で大きく報じられたのは、今年の5月末のことでした。その理由は「実験に再現性がなく、あるはずの実験データの記録も一部存在せず、追試もできなかった」ことにあり、同誌編集者とその製薬会社に調査を求めた結果の措置でした。

こうした、あるはずのない「科学者の研究と発表における不正行為」は、科学者としての生命は絶たれるにしても、これまで日本では個人的なスキャンダルとして語られるに過ぎなかったようです。ところが、それを組織の生産性や個人の競争原理が支配する今日の科学研究システムの陥穽として捉え、図書館情報学の立場から科学研究の影の部分に切り込んだのが、本書の挑発的な新鮮さとなっています。もっとも、よくある「問題提起の書」にありがちな堅苦しさはなく、欧米に赴き、足で得た証拠物件の写真や図によって、幾つかの「事件」を辿りながら、平易な語り口で論旨が整理されていきます。また、このテーマの情報資源を網羅した付録も充実していて、いかにも図書館情報学の専門家らしい著者の気配を感じます。

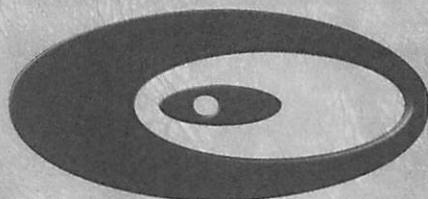
ところで、科学者の不正行為とは何か。副題にもなっている捏造・偽造・盗用は当然として、重複発表、あるいは近年増加の一途にある共著者も問題視されています。後者の二つには身につまされる科学者も多いのではないのでしょうか。「オーサーシップ」の定義は、科学者と編集者では意見が分れるそうですが、科学者の世界でも義理や人情は絡むようです。ここに現れる数々の不正行為の舞台は、著名な学術誌が多く、さらに、海外で活躍する日本人研究者の例もあって妙に感心してしまいます。それにしても、こうした不正行為をテーマにした記事をよく掲載する双璧は Nature と Science でした。さすがというかやはりというべきか。ちなみに3位は医学分野ではお馴染みのBMJでした。

一方、科学者の不正行為に対する防止や抑止策はあるのか。それに取組むアメリカの政府機関「研究公正局」や英米の医学雑誌編集者による「バンクーバー・グループ」、ケネディ記念倫理研究所図書館の積極的な活動と役割は印象的であり、日本にとっても示唆的と思いました。また、文献データベースの役割も見逃せませんが、撤回論文の明示や不正行為の発見に役立っているのは、やはり、あのPubMedでした。脱帽という他に言葉がありません。

科学者の不正行為

— 捏造・偽造・盗用 —

山崎茂明 著



丸善株式会社

(国立京都病院 図書室 小田中 徹也)